

中心部震災メモリアル拠点の方向性と役割について

1 背景

1-1 東日本大震災はどのような経験だったのか

(1) どのような出来事で

- ① **歴史的規模の災害**：約 2 万人が犠牲となり、今も 2,500 人以上が見つからない。
- ② **広域複合災害**：地震、津波、原発事故など、複合的な事象が広範囲に被害をもたらした。

(2) どのような経験があったのか

- ① **1 つに括ることができない多様な経験**：広域複合的に甚大な被害をもたらした災害であり、被災の様相やその後の動きは、個人によって大きく異なる。
- ② **社会のあり方を問われた経験**：広範囲に及んだ被害の甚大さは、個人レベルの防災を越え、人間社会のあり方まで見つめ直すきっかけだった。
- ③ **記憶や経験をつなぐことの困難さと重要性を認識した経験**：約 400 年前・1200 年前の慶長・貞観の津波など、過去の災害の存在とともに、記憶や経験をつなぐことの困難さと重要性を気づかせた。

1-2 仙台の中心部で展開する意味は何か

(1) 仙台の特質とは何か

- ① **東北の拠点・ハブ**：東北唯一の政令市であり、来訪者と東北各地を結ぶ交通の結節点。
- ② **市民力のまち**：脱スパイク運動など、社会課題に対して市民がアクションを起こしてきたまち。
- ③ **繰り返してきた災害の歴史**：約 400 年前・1200 年前の慶長・貞観の津波のほか、約 30 年に 1 度の頻度で発生する宮城県沖地震など。
- ④ **防災環境都市・仙台**：東日本大震災の経験を受けて、しなやかで強靱な防災環境都市の形成とともに、世界の防災文化への貢献、都市ブランドの確立を目指す。

(2) 中心部の場所性とは何か

- ① **多様な被災現場を持つ仙台の中心地**：沿岸部の津波被害、丘陵部の宅地被害、中心市街地の都市型災害など、多様な被災現場を持つ市の中心地。
- ② **東北のハブである仙台の玄関口**：交通利便性が高く、市民のみならず、来訪者も多く行き交う本市の玄関口。

2 拠点の軸

(1) 何をするのか

- ① **記憶を語り合う**：記憶を語ることで、他者との共有や、自身の体験の見つめ直し、次世代への継承等に取り組む場
- ② **議論し続ける場**：様々な人が立場を超えて意見を出し、議論し続ける場所が必要
- ③ **起きたこと自体を忘れない**：時が流れ、活動資金が途切れたとしても東日本大震災が起きたことを忘れない仕掛けが必要

- ④ **被災各地の活動と連携**：沿岸部のみならず被災各地における様々なメモリアルの活動と連携・協調することで、自ら学ぶこともある

(2) どのようにするのか

- ① **身近な場・開かれた空間**：重い内容を扱う場所であるが、多くの人に伝えるためには、重さだけではなく、敷居の低さや身近さも必要
- ② **多様な主体の参画**：多様なテーマ、多様な経験があり、記録の方法も多様であることから、市民も含め多様な主体で進めることが必要
- ③ **人の力と組織**：持続的に人の声を集めたり、広めたりする人の力と、市民や各機関をはじめ社会全体がアクセスするときの受け皿となる組織が必要
- ④ **時代に応じて変化し続ける場**：扱う情報や表現など、その時代に生きる人と響き合いながら、変化し続ける場

(3) 何を指すのか

- ① **新たな社会のため**：東日本大震災は社会が抱える問題点に気付くきっかけにもなった。学んだことを未来に生かし、社会を良くするために考えていくことが必要
- ② **災害文化の拠点**：自然現象は変わらないが、被害は減らせる。自然や歴史の中で自分の立ち位置を認識し、これからの社会のあり方や市民のアクションにつながる仕組みを創造するなど、災害文化を形づくっていく拠点

3 拠点の基本的方向性

東日本大震災をはじめとする災害の経験を活かし、災害とともに生きる社会のあり方を「災害文化」として、多様な主体とともにその時代にふさわしい形で継承・創造し、災害文化を持つ都市・仙台としてのアイデンティティを構築するとともに、そこで得た知見を国内外に発信する

4 拠点の役割

(1) 多様な経験の共有・蓄積・発信

災害とともに生きる都市として、長きに渡り様々な角度で災害の経験を捉え、考察・発信し続けるためには、東日本大震災をはじめ、これからの災害においても、語り合いなどを通じた経験の共有や、その蓄積が必要である。

(2) 新たな知恵の創造と社会への実装

災害とともに生きる都市として、あらゆる危機においても臨機応変に対応できる社会を形成するために、多様な経験をもとに議論し、市民のアクションにつながるアイデアや学びのプログラムを創造するとともに、社会で実践していくことが必要である。

(3) 超長期の記憶の継承

東日本大震災は、個人の想像を超え、一生に一度未満という極めて特殊な出来事であり、個人が生きる時間を越えた超長期で、起きたこと自体を伝えていく必要がある。

(4) 広域的な連携

甚大かつ広域複合的な災害について、全てのことを1か所で伝えることはできない。東北の拠点都市、そして多様な被災現場を持つ仙台市の中心地・玄関口として、市内はもとより東北の被災各地の施設・団体・個人とネットワークを形成し、相互に協力することで、情報や知恵を共有しつつ、来訪者を各地につないでいくことが必要である。

5 役割を発揮するための必須事項

(1) 多様な主体の参画

市民をはじめとした多様な主体の参画により実行していくこと。

(2) 開かれた存在であること

いかなる時代においても、あらゆる人に開かれた存在であること。

(3) 人材に力点を置いた展開

拠点の役割を担うための人材を育成しつつ、拠点に関わる人々が継続し、集中して取り組める環境があること。